

第3章

日常における河岸空間と周辺コミュニティの関係性

第3章 日常における河岸空間と周辺コミュニティの関係性

3-1 緒言

本研究では非日常＝祭を通じて河岸空間とコミュニティの関係を明らかにすることを目的とする。本章では、まず、研究の基礎とするべく、また比較対象として非日常性の影響を見るべく、「日常の関係性」に注目する。

そのため2000年10月19日-11月20日、2001年11月13日-12月5日に現地調査で得たデータを基に図2-1に図示した河岸空間・周辺コミュニティの「日常の関係性」を社会構造¹⁾という視点から明らかにする。この「日常の関係性」とは、様々な背景(宗教、出身地など)を下に形成された「モハッタ」と「ガート」、及びガンジス川と間の関係性を指している。また、聖地ヴァラナシの宗教性により、訪れる観光客もその関係性の中で必要な要素として、考慮する。

ヴァラナシにおける河岸空間ガートは宗教的な要素は第2章でも明らかであるが、人々はそういう環境の中「当たり前」の関わりを持ち生活を送っているはずである。観光客や、巡礼者が感じ取る日常とは違う聖地から感じる非日常性が24時間365日続くわけではないからである。

ここでいう「日常の関係性」とは日常生活の上で、人々が河岸空間に対してとる「当たり前」の行動を分析することによって見えてくる関わりのことである。

3-2 モハッタ住民の行動

社会構造の主体の一つである住民が、その中で日常生活上どのような行動をとるのかについて分析を行う。まずはモハッタという地域コミュニティの構成について分析を行い、人々に与える影響を分析し、次にその影響の下で人々が河岸空間であるガートに対する行動を分析する。

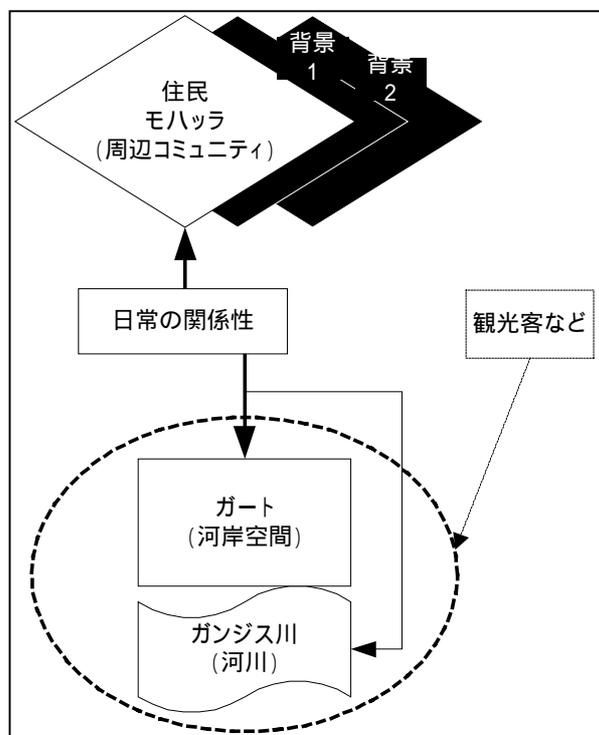


図3-1 ヴァラナシの社会構造における「日常の関係性」の位置付け

3-2-1 調査方法

【地区の選定】

モハッタ住民の行動分析を行うため、都市全体で聖域というイメージがある聖都ヴァラナシの中でも、特にその性格が色濃く残っている旧市街中心地区を選定し、調査を行った（図3-2）。

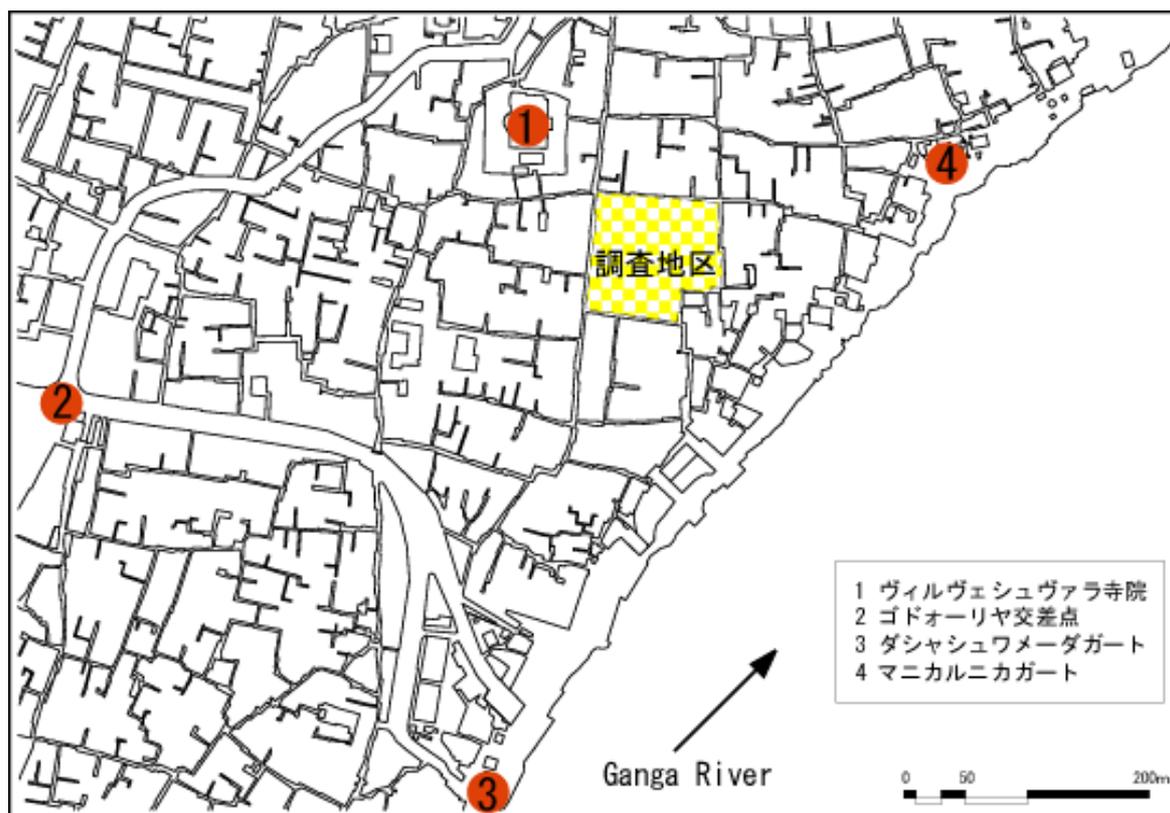


図3-2 調査地区と主要個所との位置関係

調査地区選定の理由は、以下の三点である。

ヒンドゥー教徒の信仰のシンボルであり、巡礼、観光の主目的であるヴィシュヴェシュヴァラベシュヴァラ寺院が隣接地区にあり、社会構造に対する宗教の影響がヴァラナシの中で最も大きいと推測できる地区であること。

歴史的に早くから都市化された地区であるため、街区パターンが残っている。そのため地域コミュニティであるモハッタの特徴が明確である²⁾。

ガートに近いと、日常に人々がガートに対して取る行動のデータが得られる。

【調査方法】

調査の方法は 1929 年に作成された 1 / 1000 の都市地図を基に、柳沢（1999 年）によって作成されたベースマップを使い、調査地区として選定したダルマクープ地区（地区の中心にダルマクープという伝説に出てくる有名な井戸があり、便宜上名付けた。）内の住民にヒアリング調査を行った（2000 年）。基本的には建物のオーナーに対し行ったが、それが不可能な場合に限って、他の住人に対し行った。ダルマクープ地区には住民の住む建物が全部で 71 軒あり、各項目で約 90% の解答をえた。主要な質問項目³⁾は以下の通りである。

- 1.所属モハッラ名
- 2.出身地
- 3.職業
- 4.日常の社会生活で利用するガート名
- 5.利用頻度
- 6.利用目的

また、補足調査として 2001 年にダルマクープ地区周辺において<1.所属モハッラ名>についてのみのヒアリング調査をおこなった。（図 3-2）

3 - 2 - 2 モハッラの構成要素について

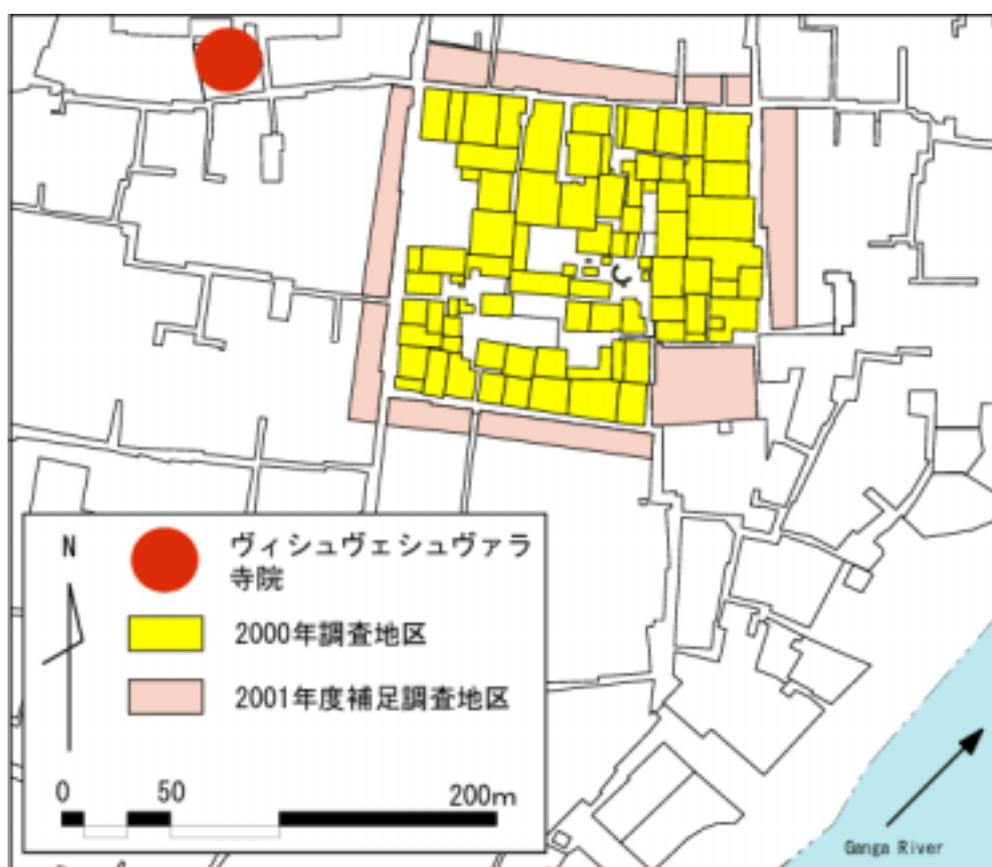


図 3 - 3 調査地区詳細図

モハッラの名称には「創設者の名前（当時の支配者）、居住者の民族・カースト名、モハッラの守護神・寺院、井戸、かつてそこに存在した池（筆者註：ここで言う池とは、主にヒンドゥー教において宗教的に重要な施設としてのkundを指している⁴⁾）、ガートの名称、伝説・歴史上の故事などに由来」⁵⁾している。総じてモハッラにはヒンドゥー教の影響を窺い知る事ができる。また川沿いの市街一体⁶⁾において、モハッラの成立した時代、既に街路が発達していた場所では街路を軸としてモハッラが形成されたようである⁷⁾。

以下、ヒアリング調査結果からダルマクープ地区のモハッラの構成を明らかにし、モハッラの住民がとる河岸空間ガートへの日常の行動を考察し、地域コミュニティであるモハッラ、及び住民とガートの関係性を明らかにする。

(1) モハッラの構成 所属モハッラの全体像

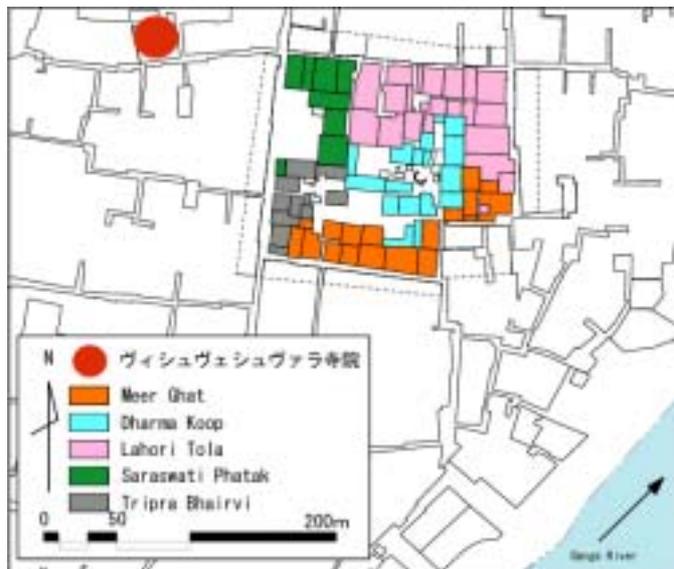


図 3 - 4 ダルマクープ地区の住民の所属モハッラ

ダルマクープ地区の住民の所属モハッラは図 3 - 4 に図示した通り、5つのモハッラの集まった街区ということが分かる。また、街区単位でモハッラが構成されていないことも明らかである。そこで、モハッラの構成要素には前述の街路や宗教施設などに起因していると考えられる。

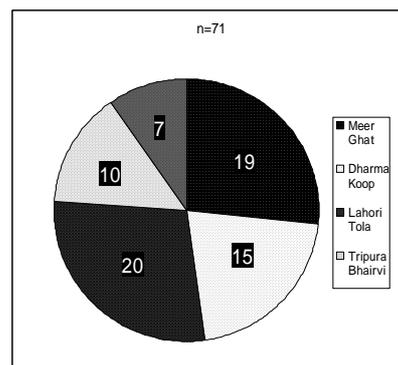


図 3 - 5 ダルマクープ地区の各モハッラ所属の件数

71 軒中の各モハッラ所属軒数については図 3 - 5 に示した通りである。5つのモハッラが目立った偏りもなく含まれている。

構成要素「ガート」：ミールガート Meer Ghat

*これ以降、文中では混乱を避けるため「ミールガート Meer Ghat」の表記を「モハッラの名称」を示す場合は「ミールガート」、「ガートの名称」を示す場合は「Meer Ghat」とする。

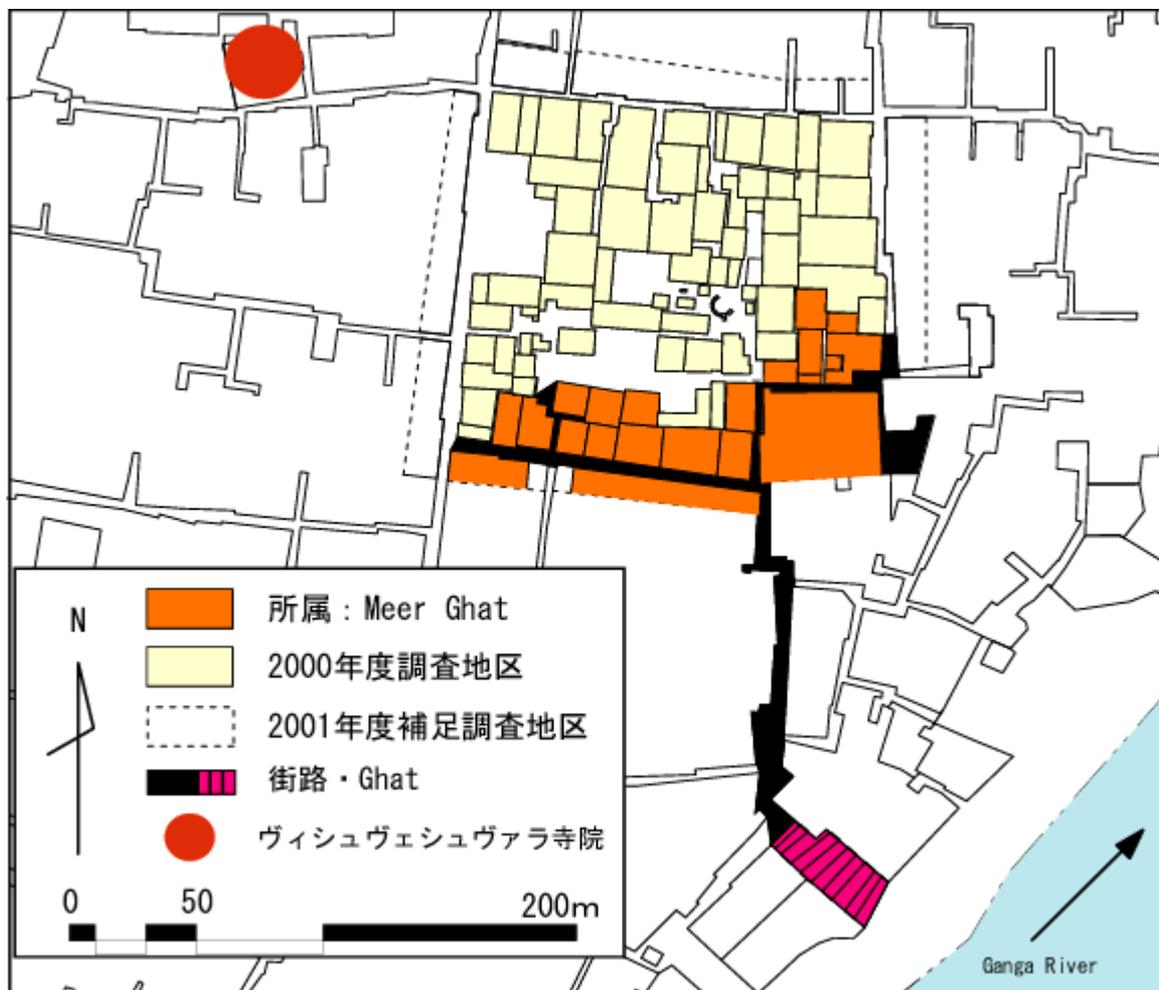


図3-6 所属モハッラ：ミールガート

ダルマクープ地区でミールガートに所属しているのは、全部で19軒である。図3-6はミールガートに所属する家々を2000年度調査に2001年度の補足調査でのヒアリング結果をあわせて、地図中にプロットしたものである。ミールガートに属する家々(黄色)は街路(赤色)を挟んで向き合っていることがわかる。「ミールガート」というモハッラ名は街路(赤色)をガンジス川に向かって進んだ先にある河岸空間の Meer Ghat に由来しており、そこへの導線としての街路によってモハッラが規定されていると言える。また住民が日常使用するガートについても、当然モハッラ名から、Meer Ghat であることは明確であり、モハッラの構成要素としてガートとの関係性が明確なモハッラと言える。

構成要素「出身地」: ラホーリトーラ Lahori Tola

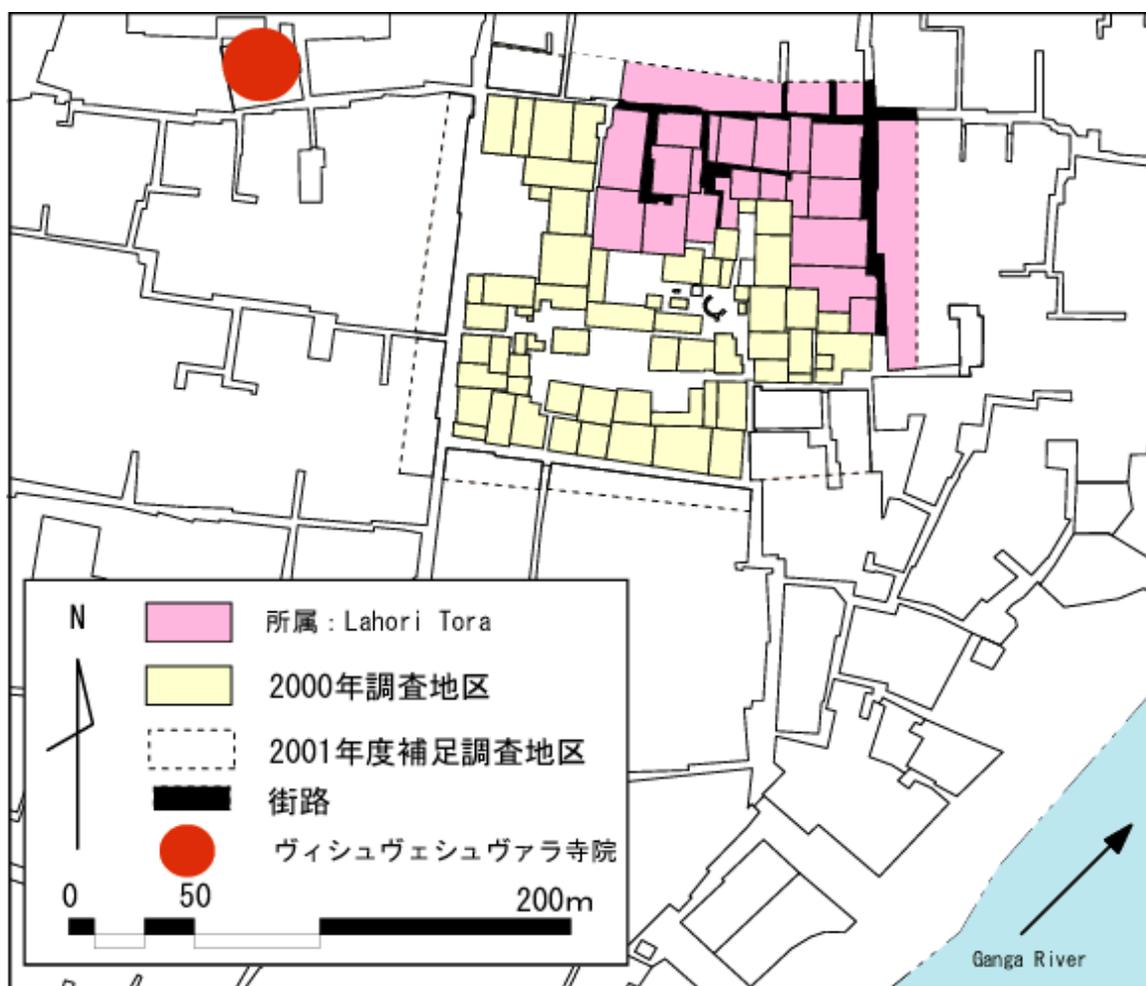


図3-7 所属: ラホーリトーラ

図3-7はミールガートと同じように、住民の所属するモハツラを地図上にプロットしたものである。街路を挟んだ家々がラホーリトーラに所属していることが明らかであり、街路を軸にモハツラが構成されていると考えられる。また「ラホーリトーラ Lahori Tola」という名称は現在のパキスタン、パンジャブ州の州都ラホール Lahore 出身者が集まる道 Tola⁸⁾という意味である。ラホーリトーラの他にも、出身地(原住地)と道で表されるモハツラはベンガリトーラ Bengali Tola⁹⁾など多くある。都市が形成された頃に、同じ出身地から移住してきた人々の集まりによって形成され地域コミュニティの様相を呈していた証ともなる。これらのことからこのモハツラが同じ出身地の住民が集まり形成されたという歴史があり、街路を挟む両側町の構造という規則性をもって構成され、規定されていることが分かる。

構成要素「伝説」：ダルマクーブ Dharma koop¹⁰⁾

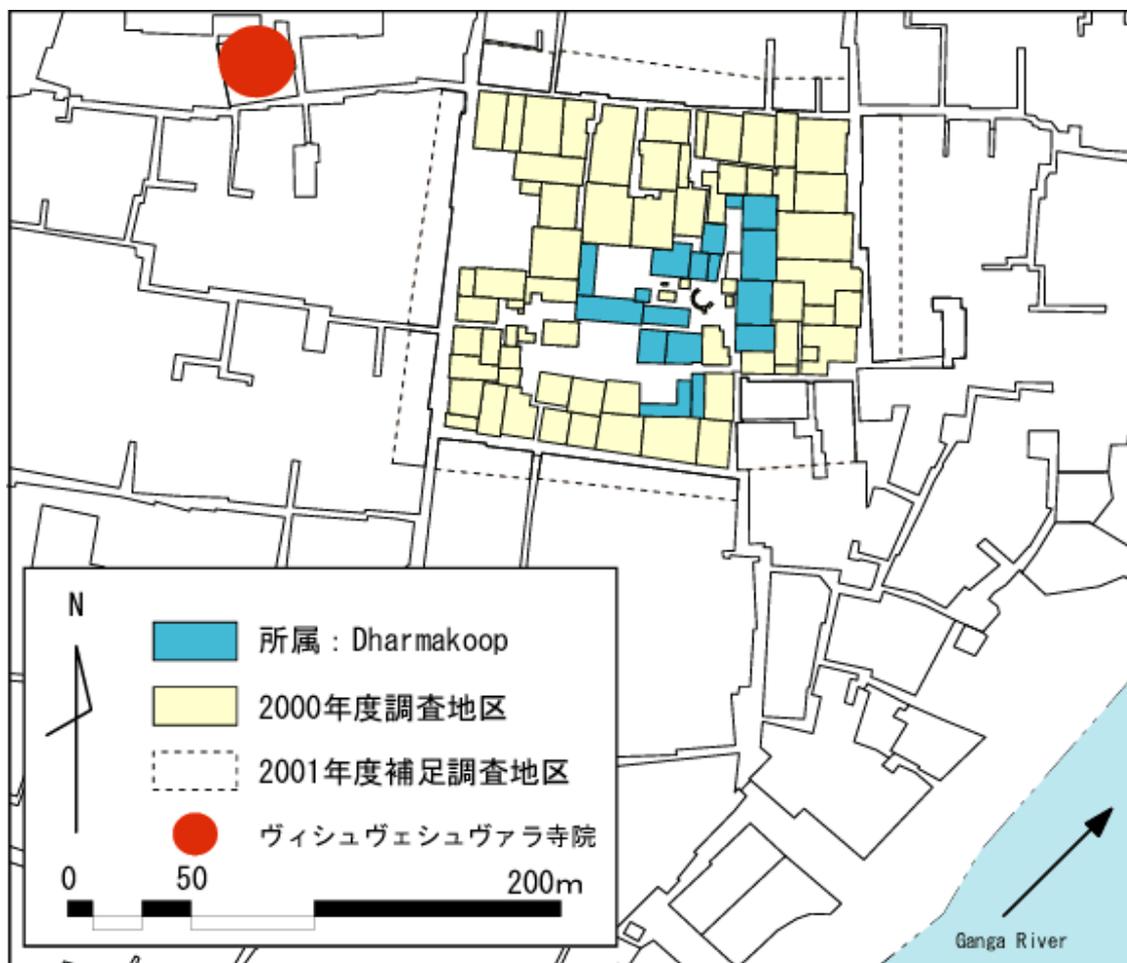


図3-8 所属：ダルマクーブ

「Dharmakoop」というモハッラの名前はモハッラの中央にある伝説に登場する有名な井戸に由来している。この井戸は現存しており、生活用水として、そして信仰の対象としてこの区域では非常に高名である。この井戸のある中央の小広場を囲むようにして、これに面した家々によってモハッラは構成されている。伝説施設に由来するモハッラの典型といえるだろう。街路を軸にして構成されていた他のモハッラと同じく、その由来となる対象に対して面していることがその条件である。

構成要素「門」: サラスワティパタック Saraswati Phatak

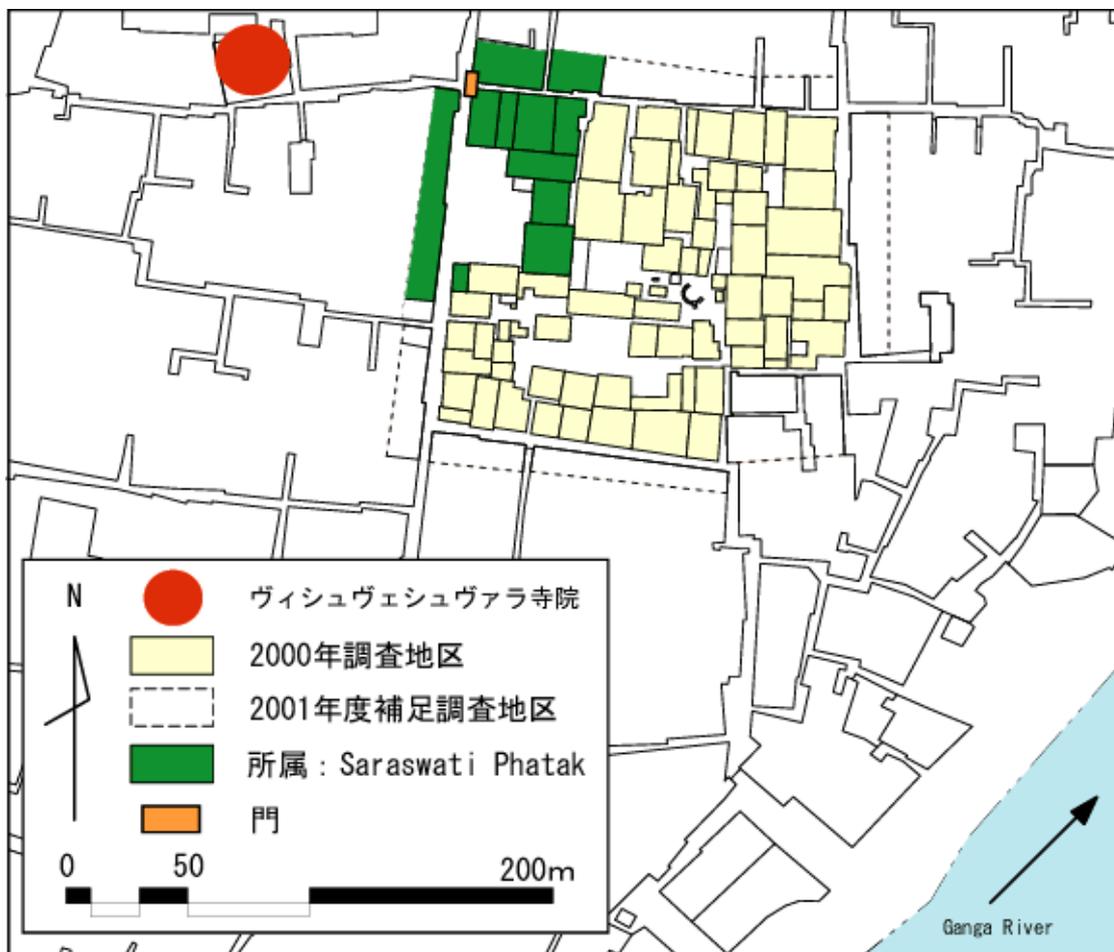


図3-9 所属: サラスワティパタック

中心に「Saraswati」という守護神を祀る祠のある門からこの名がついた。この門はラリタガート Lalita からヴィシュヴェシュヴァラ寺院へやってくる巡礼者、観光客が必ず(と行っていい)くぐる門であり、信仰の対象としてポピュラーなものである。通常、モハッラの境界には「門」や「寺院・祠」が設置されているが、この場合は境界ではなく信仰対象として、シンボルとしての門であり、前述のダルマクープと同じ意味を持つものであり、それがモハッラの構成要素といえるだろう。境界としてはむしろ、ラホーリトーラとの境界に当たる「祠」が適当である。

(2) 門について

上述してきたモハッラの構成要素によって、規定されたモハッラの規模を示し、境界を示すものとして「門」や「祠」がある。特に「門」はモハッラの物理的範囲を示すものとして多くのモハッラで見られる。R. L. Singh (1955)¹¹⁾によると住民によって雇われた門の番人が都市全体で約500人おり、毎晩60の街門が閉鎖され守られてきたという。現在、モハッラ内の住民を外部者から防ぐという防衛機能は失われ、実際に使われている例は数えるほどしか存在しない¹²⁾。しかし、門跡は現在も多数残っており、モハッラの境界として重要な指標となる。

ヒアリング調査で、モハッラの境界を調査している際に「あの門からこちら側が、私たちのモハッラ」、「あの門の跡の向こう側からは違うモハッラ」だと多くの住民からいわれた。この門跡が物理的な境界であることはもとより、門よりも内側が自らのモハッラであるとう精神的な境界を示しているとも言えるようである。

ダルマクープ地区から少し南に入った、マンマンディール(モハッラ名)にあるタバコ屋の主人は門について訪ねると「小さかった5,60年前まで門の開閉が行われていた」と教えてくれ、トリプラバイルピ(モハッラ名)との境界に当たる門の前まで連れて行ってくれた。

またガートの周辺コミュニティでは街路からガートへ出る境界に門が建造されており、常に開かれた空間であるガートとモハッラを繋ぐ街路に設置する門は、都市内部の門と同じく、防衛機能の意味が非常に大きかった。もちろん現在はほとんどが跡としてしか残っていない。そういう意味では物理的な物である。しかし、開かれた空間と、モハッラというある種の私的內部空間とを隔てるものとして、そして自らのモハッラを認識するものとして、モハッラという「内側」を確認するための精神的な境界を示すものということができる。

このように「門」が物理的にはもちろん、精神的にも境界を示しているものである。

(3) まとめ

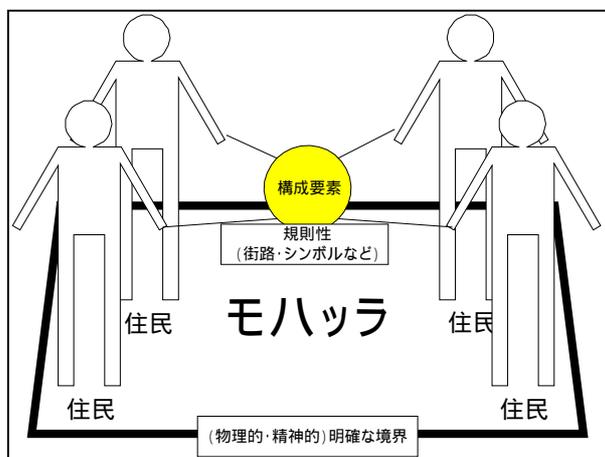


図3-10にモハッラの構造を概念図として表した。モハッラは構成要素となる中心のもたらず規則性によって住民はコミュニティを形成する。そして規則性のもたらず規定により物理的、精神的に明確な境界を持つこととなる。

また、これらモハッラの構成要素から、以下にモデル化し、ダルマクープ地区内におけるモハッラの構成を3タイプにまとめた。

図3-10 モハッラの構造概念図

- タイプ 1 街路型：街路によって規定されるモハッラ；ミールガート、ラホーリトーラ
- タイプ 2 シンボル型：象徴となる井戸や祠により規定されるモハッラ；ダルマクープ
- タイプ 3 シンボル・街路型：象徴に付随する街路によって規定されるモハッラ；サラスワティパタック

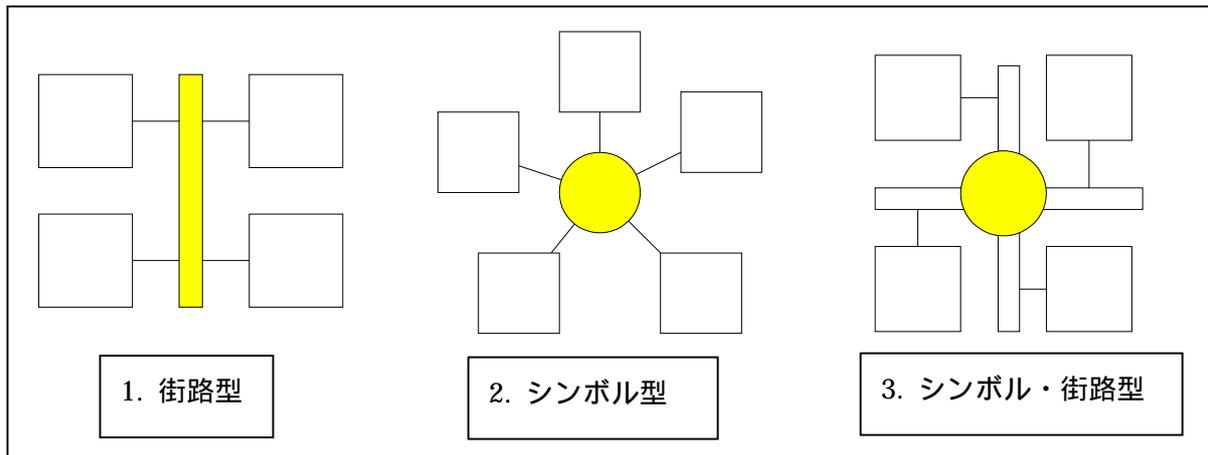


図 3 - 11 構成要素に見るモハッラのタイプ

3 - 2 - 3 河岸空間での行動分析、及び考察

前項でモハッラとは街路やシンボルといったものに規定され、構成されていることがわかった。本項ではその規定によって構成されるモハッラという地域コミュニティの構成員である住民が、河岸空間「ガート」に対してとる行動に目を向けてみる。つまり、日常生活において住民のとるガートでの行動について、ヒアリングデータから分析を行うことによって見えてくる関係性についての考察を行うことが目的である。

【日常に使用するガートから見る関係性】

右の図 3 - 12 はダルマクープ地区の住民が日常に使用するガートとその軒数である。(*2 つ以上のガート名を挙げた場合は複数とした)

まず、拒否、不明を除く 63 軒(88.7%) が日常に使うガートを決めている。この数字からも住民の日常生活にガートが密接に関係していることが伺える。また 63 軒のうち 65% に当たる 41 軒が

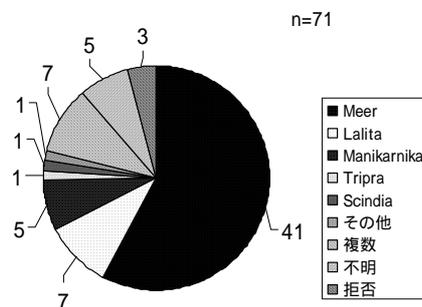


図 3 - 12 ダルマクープ地区の住民が日常使用するガートの割合

Meer Ghat を使用している。複数の中で Meer Ghat を含んでいた人を合わせると、実に 69.8% と実に 7 割の人が Meer Ghat を使用している。この地区のモハッラにおいて最も使用する人が多いガートはミールガートということになるだろう。

日常使用されているガートは南からトリプライルビガート、ミールガート、ラリタガート、マニカルニカガート、シンディアガートが上げられた。各ガートとモハッラの位置関係は、南のトリプライルビガートからシンディアガートまでは直線距離にして約 500m である。

【所属モハッラ別日常使用ガートから見る関係性】

では、次にモハッラ毎に使用するガートについて見てみる。表 3 - 1 は所属モハッラ別の日常に使用するガートの一覧である。この結果を地図にプロットしたものが図 3-12 である。

表 3 - 1 所属モハッラ別における日常の使用ガート一覧

所属モハッラ	日常使用ガート	日常使用ガート									
		Meer	Lalita	Manikarnika	Tripura	Scindia	その他	複数	不明	拒否	合計
ミールガート		14	0	0	0	0	0	1	2	1	18
ダルマクープ		14	0	0	0	0	1	0	0	0	15
ラホーリトーラ		5	7	3	0	0	0	1	2	2	19
サラスパティパタック		2	0	1	0	1	0	3	0	0	7
トリプライルビ		5	0	1	1	0	0	2	1	0	10
合計		41	7	5	1	1	1	7	5	3	71

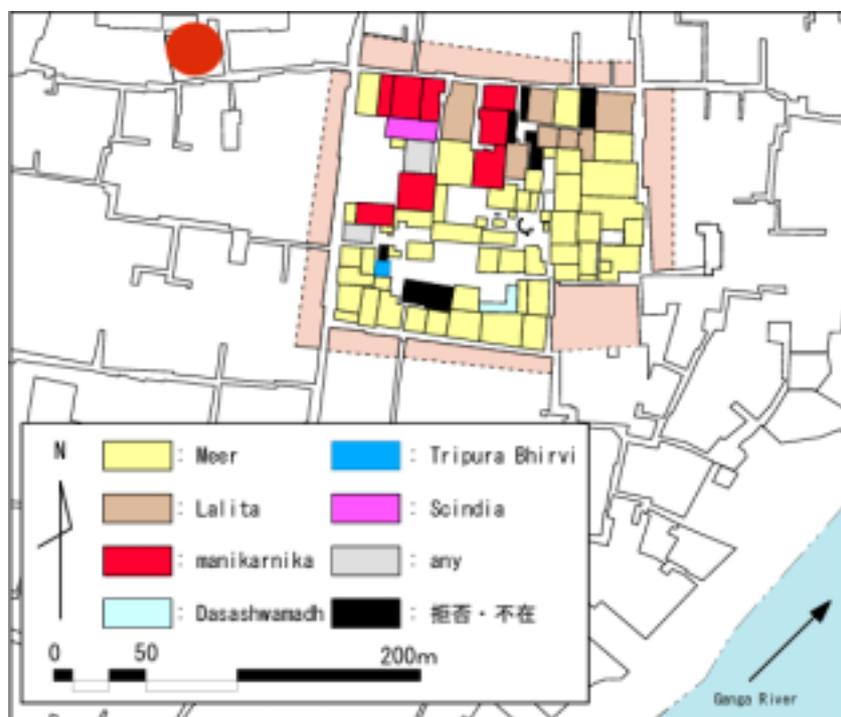


図 3 - 13 ダルマクープ地区住民の日常使用するガート

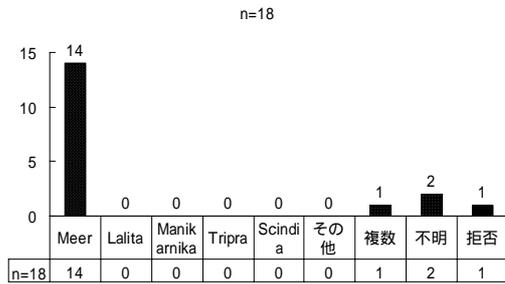


図 3 - 14 ミールガート住民の
使用ガート

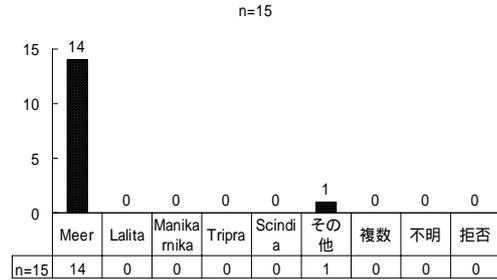


図 3 - 15 ダルマクープ住民の
使用ガート

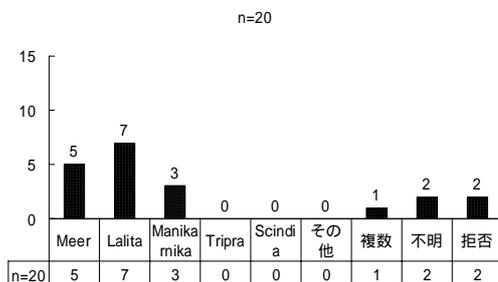


図 3 - 16 ラホーリトーラ住民の
使用ガート

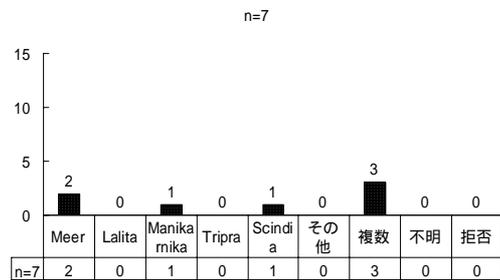


図 3 - 17 サラスパティパタック住民
の使用ガート

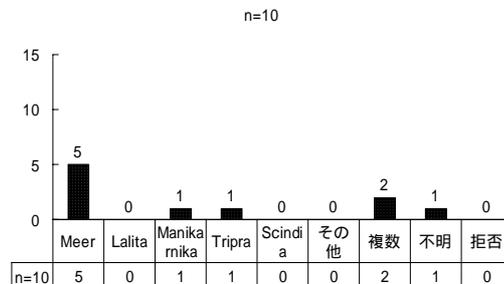


図 3 - 18 トリプラバイルビ住民の
使用ガート

ミールガートは不明（解答が得られなかった）、拒否を除く約 80%の住民が Meer Ghat を使用していることになる。ミールガートは、前述した通り、「ガートに対する導線にあたる街路」によって規定されているモハッタである。そのことが日常使用するガートからも証明されている。加えて、ダルマクープの住民もミールガートを使用している。このことから、少なくともミールガート、ダルマクープにおいては日常において使用するガートは、モハッタで共通している。その理由として考えられるのは、先ず、物理的な理由として最も近いガートを利用しているためであり、そして「導線に当たる街路」の為だと考えられる。ミールガートは前述の通り、Meer Ghat に繋がる街路に面した地域であり、ダルマク

ープはモハッラの物理的な構造上、全ての住人が Meer Ghat へ繋がる道へ出るようになっている。

次にガートがモハッラの住民に対して与えている影響という側面から考えてみる。構成要素、物理的要素を考えるとミールガート、ダルマクープは Meer Ghat の影響が強いモハッラであると考えられる。つまり、人々にとっては、それら要素から「地元のガート」として Meer Ghat を使用するように関係性が規定されているのである。しかしこの街路からは離れたモハッラ「ラホーリトーラ」「サラスパティパタック」などでは日常に使用するガート（もしくは複数の中の一つ）として「マニカルニカガート」を挙げている（図 3 - 13 の地図中に赤色で示した部分）。マニカルニカガートは Meer Ghat へ行くよりも物理的な距離は遠くなる訳だが、人々はミールガートには行かず、マニカルニカガート行くのである。これには第一章で述べたマニカルニカガートのもつ非常に高い聖地性の影響が、距離的には近い Meer Ghat などの他のガートよりも、この街区にまで及んでいると考えられる。

【モハッラとの関係性によるガートの概念的位置付け】

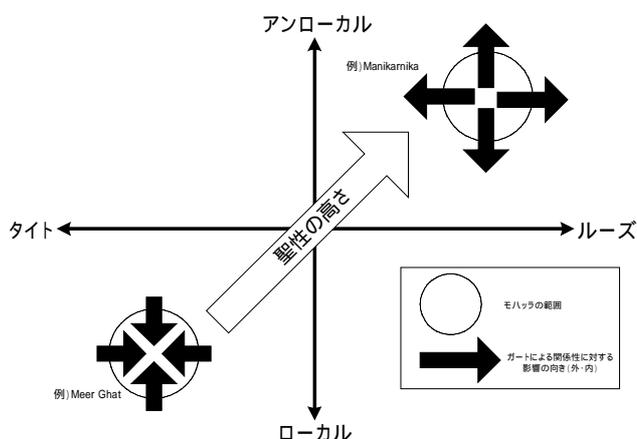


図 3 - 19 ガートの概念的位置付け

まとめると Meer Ghat は構成要素の規定を受けている範囲内では、住民に対して非常に強固な関係性を持っている。しかしその範囲を越えてしまうと影響は薄らいでしまう。このことは Meer Ghat に繋がる街路から離れたモハッラの住民が、物理的な距離がさほど離れていないにも関わらず、他のガートを使用していることから分かる。

逆にマニカルニカガートは物理的な距離というものを越え

てしまう聖性の影響の強さと考えられる。つまり、ここでは「Meer Ghat」はモハッラにとってのガートであり、「タイト」で「ローカル」なものである。「タイト」とは使用などに制限があるという概念ではなく、むしろそのガートを使うことにメリットが得られる人々を限定するという意味である。

「マニカルニカガート」のような特に聖地性の高いガートは、モハッラにとってはもちろんであるが、ヒンドゥー教徒全てのためのガートでもあり、「ルーズ」で「アンローカル」¹³⁾なガートと概念的に位置付けられる（図 3 - 19）。このことはガートの持つヒエラルキーからも説明がつく概念である。

【ガートでの行動における特性】

ガートの使用目的に対して、回答の得られた64人(71軒中：拒否3・不明4、複数回答あり)の結果をまとめたものが図3-20である。

まず、ガートに人々が行く最大の目的は59人92%の「祈り」であり、日常の行動にヴァラナシの聖地性の現れと見ることができるだろう。

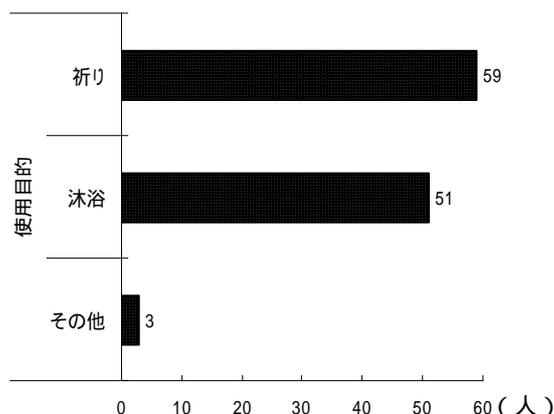


図3-20 ガートの使用目的集計
(有効回答64、複数回答あり)

また「祈り」が目的であると答えた59人のうち、複数回答として「沐浴」と答えた人は46人78%であった。「祈り」+「沐浴」+「その他」と答えた人を合わせると、80%にもなる。

ガートへ行く目的が「沐浴」としている人は59人中51人、80%であった。これもまた、「祈り」と同じように聖地性の表象であろう。

また目的が「沐浴」と答えた人51人中46人、90%の人が「祈り」とも答えている(沐浴のみという人が5人)。「沐浴」を目的でガートに行く人たちがほとんどが、同時に「祈り」が目的であるといえる。

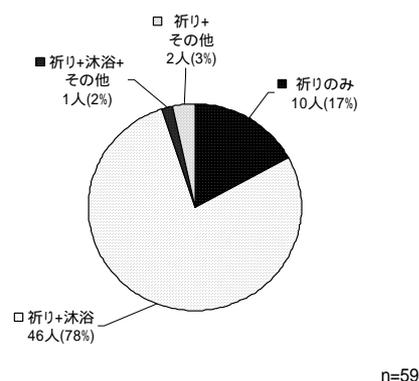


図3-21 目的「祈り」のうちわけ

使用目的として「祈り」と「沐浴」と回答した住民はモハッタ別には総じて60%を越えている。「祈り」、もしくは「沐浴」のどちらかを挙げた住民は、100%(64/64)であった。

表3-2 モハッタ別の利用目的

		祈り	沐浴	祈り+沐浴	祈り or 沐浴	回答数
モ所 八属 ッ ラ	ミールガート	14	10	9	15	15
	ダルマクープ	15	14	14	15	15
	ラホーリトーラ	17	13	12	18	18
	トリプラパイルピ	7	9	6	10	10
	サラスパティパタック	5	6	5	6	6
合計		58	52	46	64	64

以上、まとめるとガートでの周辺住民の行動は主に「祈り」と「沐浴」ということに集約できる。

また、目的が「祈り」と「沐浴」である人たちの、使用頻度については「毎日」と答えた人が46人中19人で40%、「週に数日」と答えた人が46人中11人で23%であった。また、「特別な時」と答えた人が59人中12人で、「不定期」と答えた人が19人中4人であった。「毎日」、「週に数日」を合わせると実に63%の人が頻繁にガートに行くことになる。

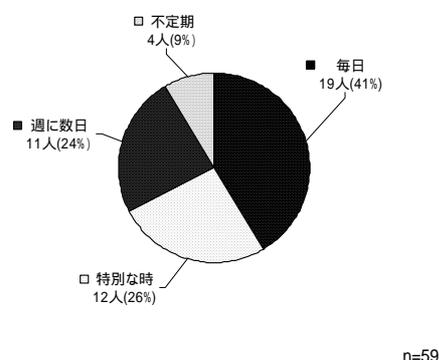


図3-22 ガートの使用頻度

ガートに行くという行為は、自らの信仰に起因しており、ヴァナラシの住民にとってそれが日常生活の一部であり、日常行為の場としてガートが人々に認識されていると考えられるだろう。観光客、巡礼者にとって非常に特別で神聖な場所（ティールタ）であるはずのガートも、地元住民にとっては日常行為の場となっているのである。

3-3 日常における河岸空間と周辺コミュニティの関係性のまとめ

3-3-1 日常の河岸空間<ガート>と周辺コミュニティ<モハッラ>について

日常の河岸空間<ガート>と周辺コミュニティ<モハッラ>について分かったことをまとめた。

・モハッラは、「ガートに繋がる街路」「出身などの集まりによる街路」「伝説・宗教的シンボル」などのモハッラを構成している要素のもと、物理的・精神的な境界が示され、範囲・規模が規定され構成されている。

・モハッラの住民が使用するガートは、ガートによる影響の及ぼせる範囲である程度決定される。またそのことより概念的に84あるガートを分類するための概念図を作成した（図3-19参照）。一般的に五大ガートと呼ばれるものは「ルーズ」で「アンローカル」なガートとし、残りを「タイト」で「ローカル」なガートとなる。前者は物理的に近いモハッラに対しては当然、行動をする場のガートとして影響を与えるのだが、非常に高い聖地性のため、全てのヒンドゥー教徒にとっての聖地であるという側面の方が重要である。

逆に後者は、周辺コミュニティとしてのモハッラとの物理的、及び精神的距離が近いガートである。つまり「タイト」で「ローカル」なガートを使用する住民が所属しているモハッラは、周辺モハッラということに限定されている。その理由には、日常生活で行うガ

ートでの「祈り」や「沐浴」という行為に、パンチティールタに代表されるような聖性を必要としていないからである。逆に観光客や巡礼者にとってはパンチティールタのような聖性を持たないガートはメリットのあるものではなく、自然と使用者は地元住民 = 「ローカル」になる。

また、ガートの帰属に関して言えば、モハッラと「ローカル」で「タイト」なガートの関係は1対1の厳密なものではないが、誰もが使用するガートでもなく、周辺のモハッラに帰属しているといえる。

・ガートにおける、住民の行動は主に「祈り」「沐浴」である。しかし、これは特別なことではなく、日常行われていることである。特に「ローカル」で「タイト」なガートでのこのような行動は日常生活の一部であり、ガートは生活の場としての意味を持つ。

3-3-2 日常における河岸空間<ガート>と周辺コミュニティ<モハッラ>、及び河川<ガンジス川>の相関

ここでは、「ガート」,「モハッラ」,及び「ガンジス川」の相互作用、ならびに相関関係を図3-19によって示した概念を基に「ローカル」-「タイト」なガートを中心にしたものと、「ルーズ」-「アンローカル」なガートを中心にしたものに分け、それぞれの関係を示した構造図としてまとめた。(図3-23、24)

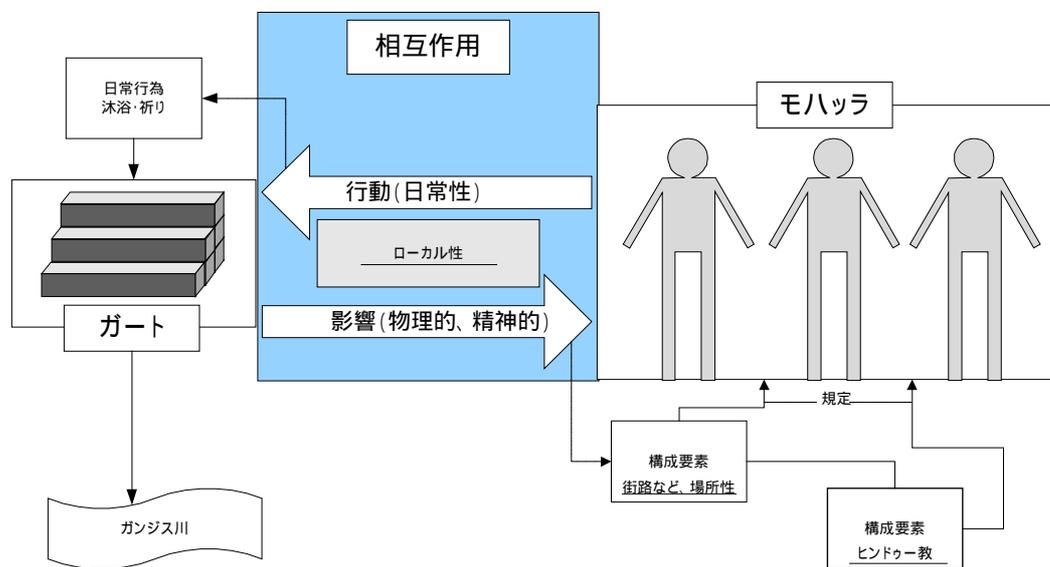


図3-23 「ローカル」-「タイト」なガートを中心とした構造図

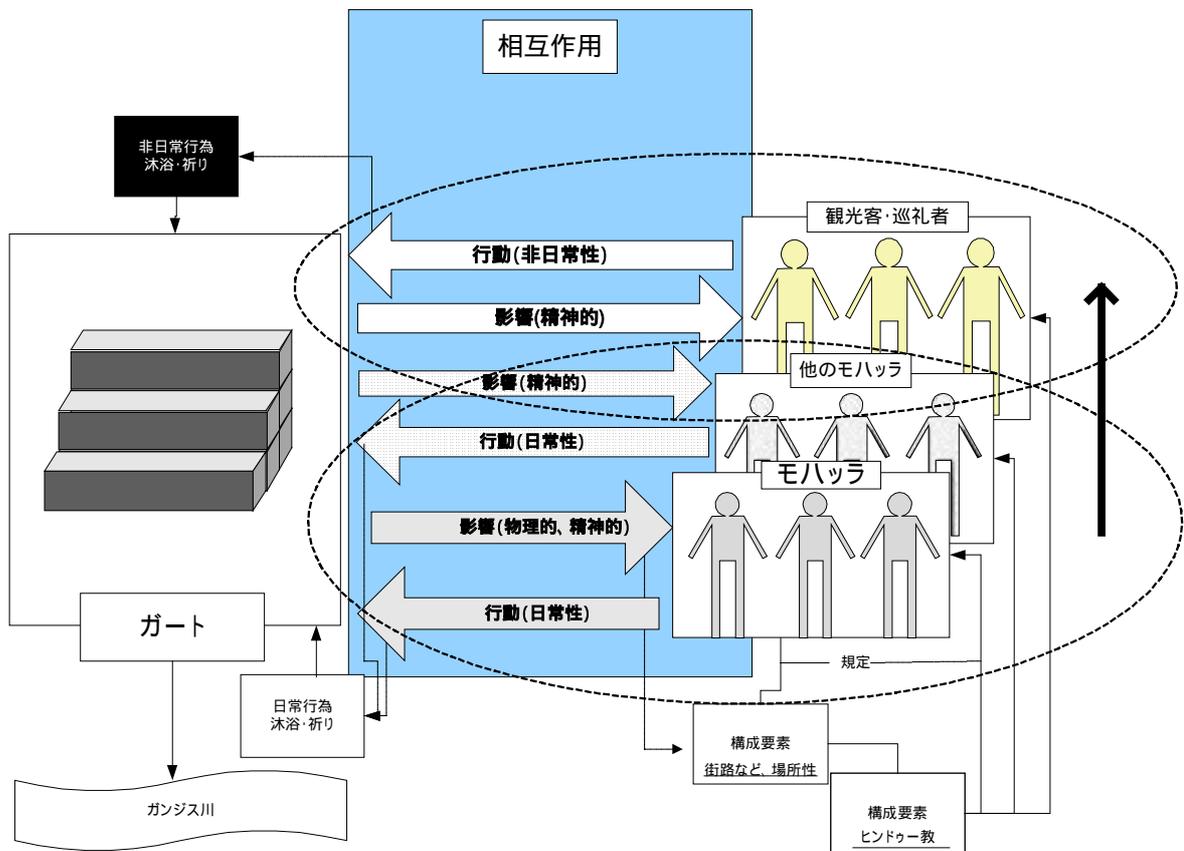


図 3 - 24 「アンローカル」 - 「ルーズ」なガートを中心とした構造図

「日常の場」としてのガートについて

*日常行為の場としてのガート

ガートが日常行為の場でもあり、ということは柳沢（2000）によって行われた定点観察のデータからも実証されている。

柳沢はガートで行われる行為を＜宗教的・必要的・余暇的＞の三つのカテゴリーにわけ、一時間単位で、行為を行った人数の集計を出している¹⁴⁾。注目すべきはこの中で＜必要的行為＞として挙げられている洗濯・水浴・洗髪・歯磨き・仕事・家事・食事・排泄という行為が全体の30%を占めていることである。これらの行為は、通常家屋で行われてもおかしくない生活に必要な行為である。柳沢はその理由を水道事情の悪さだと指摘し、ガートを水に関わる行為場所としての重要な都市施設だとしている。

*1. 祈り praying

*2. 沐浴 bathing

*1 一般的にヒンディー語では「puja」とよばれる「お祈り」。

*2 沐浴とは近藤（1996）¹⁵⁾によって拡張された沐浴の概念における表3-3「沐浴対象と目的からみた沐浴の分類」の中で、＜沐浴対象：状態；液体、対象；水、沐浴；冷水浴において、目的：儀式宗教上・保健衛生上・娯楽上＞に該当するものを指すこととする。

表3-3 沐浴対象から見た沐浴の分類

沐浴観山のラフスケッチ — 花 —

表-1 沐浴対象と目的からみた沐浴の分類

沐浴対象	沐浴目的	沐浴対象	沐浴目的	沐浴対象	沐浴目的
宗教的	儀式祈りと	納骨塔上	保健衛生上	納骨塔上	納骨塔上
必要	洗濯	洗面	洗髪	洗髪	洗髪
余暇	水浴	水浴	水浴	水浴	水浴
その他	その他	その他	その他	その他	その他

注：本表は柳沢（2000）の調査結果に基づき、本文の記述に合わせて整理された。詳細は柳沢（2000）を参照。

第3章 引用文献、及び補注

- 1) 三省堂 『ハイブリッド新辞林』：[社会構造];社会および集団を構成する諸要素が一定の原理に従って有機的に配置・統一される体系。
- 2) 柳沢究：ヴァラナシ（インド）の都市空間構成原理に関する研究，第3章3節，京都大学大学院工学研究科修士論文（2000）
- 3) 共同調査のため、本研究に必要なもの = 主な質問項目とした。
- 4) Daiana L. Eck： Banaras City of Light，p50・373， Penguin Books India（1983）
- 5) 柳沢：前掲書，第3章3節
- 6) 調査地区も川沿いの市街に含まれている。近年までは川沿いの市街以外ではほとんど市街化されていなかった。川沿いの市街に含まれないモハッラには非常に大きな規模のモハッラが見られ、川沿いのそれらとは明らかに規模、成立理由などに違いがある。
- 7) 柳沢：前掲書，第3章3節
- 8) tola は道という意味である。その他にも細い道という意味の gali なども、モハッラの名称に使われる例が多数ある。
- 9) Sherring: Benares The Sacred City of The Hindus in Ancient and Modern Time ,pp146 - 147 , Low Price Publications (1868 , re1990). Eck : 前掲書 , p158,226 , etc. ; 多数の書籍 , 資料に散見される
- 10) Sherring : 前掲書 , pp85-86
- 11) R. L. Singh : 前掲書 , p37
- 12) 柳沢 : 前掲書 , 第3章3節
- 13) 井上真・宮内泰介 : コモنزの社会学 森・川・海の資源共同管理を考える , pp1 - 30 , 新曜社 (2001)
- 14) 柳沢 : 前掲書 , 第3章3節
- 15) 近藤隆二郎 : 沐浴としてのラフスケッチ 水文化の再構成を目指して , 都市問題研究 , 48 (8) , pp71 - 84 (1996)